

新型コロナウイルス感染症 学校における感染対策ガイドライン

(令和3年10月7日版)



千葉県マスコットキャラクター
「チーバくん」

新型コロナウイルス感染症については、これまで、度重なる感染拡大の局面に直面し、各学校において、長期に渡り、様々に対応を実施してきたところですが、今後も引き続き確実な対応が求められます。

このため、本ガイドラインの各対策を確実にいき、それらを継続していくことができるよう、持続可能な方法や手順、必要な体制の整備等により、質を確保しつつ日常化すること、かつ対策に緩みが生じることのないよう配慮することが大切です。また、一部の教職員のみ負担がかかることのないよう学校全体で組織的に実行していくようお願いいたします。

各学校における対策の確認にあたっては、本ガイドラインの各対策項目の冒頭にある□(チェックボックス)を利用し、常に万全の対策がとられているか確認をお願いします。

本ガイドラインを参考に、学校における新型コロナウイルスの感染及びその拡大防止に向け、引き続き、感染症対策の徹底をお願いいたします。

(本ガイドラインは、最新の知見や状況等を踏まえ、随時、改訂してまいります。)

【目次】

1	校内体制の整備	1
2	連絡体制の整備	2
3	家庭との連携	3
4	学校における感染症対策の基本	4
5	健康観察の徹底	6
6	基本的な感染症対策の徹底	11
	＜対策別＞	11
	＜場面別＞	19
7	感染者等が発生した場合の対応	25
	(1) 感染者が発生した場合の対応	25
	(2) 濃厚接触者が発生した場合の対応	29
	(3) 感染が疑われる者が発生した場合の対応	31
	(4) 出席停止等の取扱い(感染・濃厚接触者以外の場合を含む)	32
8	児童生徒等への正しい知識等の指導と心のケア	35
9	教職員の感染症対策の徹底等	38

1 校内体制の整備

各学校においては、当面の間、新型コロナウイルス感染症対策にあたる対策本部を設置し、学校全体で感染症対策に取り組む体制を整備することとする。


設置にあたっては、学校の規模や教職員構成に応じた対策本部を組織するものとし、以下の例を参考に、実働的な対策本部となるよう努める。

<対策本部の役割>

平時:感染症対策の検討・実施、児童生徒等及び教職員の健康状況確認 等
感染者等発生時:対応の総括・指示、保健所との連絡、情報発信 等


<対策本部の設置例>

〔例1〕既存の委員会等を利用して設置する。

(例) ・企画委員会
・連絡調整会議 等  対策本部

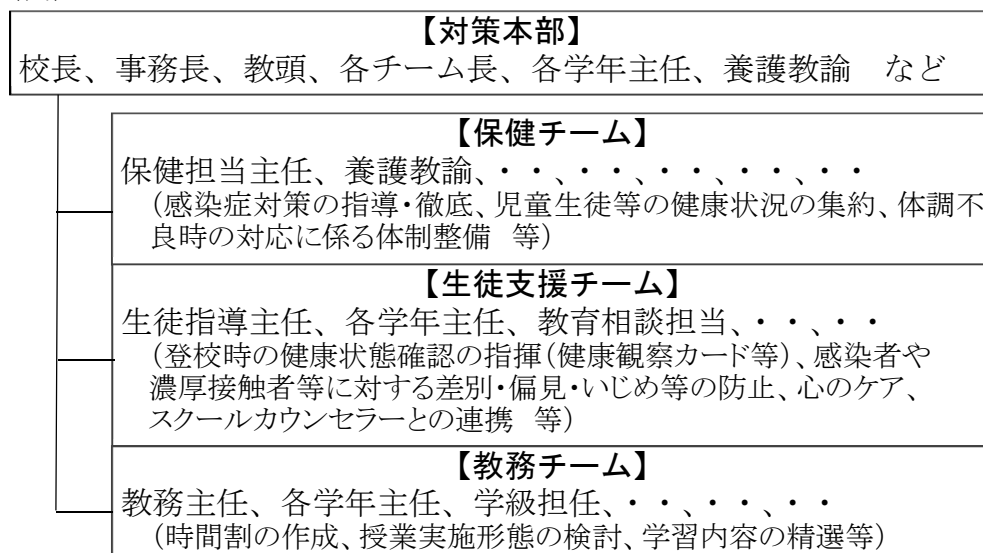
〔例2〕基本メンバーを決め、扱う内容によりメンバーを増減する。

(例) 感染者発生時

【対策本部】 校長、事務長、教頭、教務主任、 学年主任、養護教諭 など		学級担任 教科担当 など
--	---	-----------------

〔例3〕対策本部に加え、小チームを設置する。

(例)



2 連絡体制の整備

(1) 関係機関への連絡

あらかじめ、学校所在地を管轄する保健所、教育委員会、学校医等の緊急連絡先一覧を作成し、教職員間で共有する。

(2) 教職員への連絡

- 緊急時の連絡網やメール配信など、休日や夜間等の連絡方法を明確にし、改めて教職員間で共有する。
- 校長は、教職員が感染者となった場合など、本人以外の緊急連絡先が必要となった場合に備え、可能な範囲で把握しておく。

(3) 保護者、児童生徒等への連絡

保護者への連絡体制（メール配信、電話による連絡など）を確認する。また、学校のホームページを活用した情報提供方法を検討する。

3 家庭との連携

児童生徒等の感染経路として、「家庭内感染」が最多である現状を踏まえ、家庭から学校に感染を広げないように、各家庭の理解と協力を得る。

(1) 健康観察、登校の判断

- 児童生徒等は、毎朝、登校前に検温及び風邪症状の確認を行う。
同居の家族にも、毎朝、検温等の健康状態の確認を依頼する。
- 児童生徒等は、発熱や風邪症状がある場合は、自宅で休養する。
感染経路の不明な感染者数が増加している地域では、同居の家族に発熱や風邪症状がある場合も、登校を控えるよう依頼する。
- 以下の場合、PCR検査等の結果が判明するまで登校を控えるよう依頼する。
 - ・同居の家族が、濃厚接触者に特定されPCR検査等を受ける場合
 - ・児童生徒等又は同居の家族が、濃厚接触者ではないが医師や保健所の指示等でPCR検査等を受ける場合

(2) 休日や学校外の活動

- 学校外でも、換気が悪く人が密に集まって過ごすような空間に集団で集まることを避ける。
- 特に、活動範囲が広がる高校生等は、学校外の私的な活動や交流等の際し、十分な感染症対策が講じられているか確認し、行動する。
- 感染経路の不明な感染者数が増加している地域では、不要不急の外出を控える、仲の良い友人同士の家庭間の行き来を控える、家族ぐるみの交流による接触を控えるなど、学校を通じた人間関係の中で感染が広がらないように十分に注意する。

(3) 家庭から学校への連絡

以下の場合、速やかに学校へ連絡するよう依頼する。

- ・児童生徒等が、新型コロナウイルス感染症に感染した場合又は濃厚接触者に特定された場合(同居の家族が感染した等)。
- ・同居の家族が、濃厚接触者に特定されPCR検査等を受ける場合
- ・児童生徒等又は同居の家族が、濃厚接触者ではないが医師や保健所の指示等でPCR検査等を受ける場合

4 学校における感染対策の基本

(1) 感染症予防の3原則

□感染源を絶つ

⇒ 発熱や風邪症状のある者等の自宅休養の徹底

本ガイドライン P6~10「5 健康観察の徹底」

- (1) 家庭における登校前の検温・風邪症状の確認
- (2) 学校における登校時の健康状態の確認
- (3) 外部からの来校者に対する健康状態の確認

□感染経路を絶つ

⇒ 手洗い、咳エチケット、清掃及び消毒の徹底

本ガイドライン P11~15「6 基本的な感染症対策の徹底」

- ・石けんによる手洗い
- ・咳エチケット
- ・学校施設や用具等の清掃及び消毒

□身体全体の抵抗力を高める

⇒ 基本的な体調管理に努め、 規則正しい生活を心がける

- ・十分な休養及び睡眠
- ・適度な運動
- ・バランスのとれた食事 など

(2) 集団感染のリスクへの対応

リスクが高まるとされる、3つの条件（3つの密：密閉、密集、密接）の「重なり」はもちろんのこと、「1つ1つの条件」が発生しないことを目指す。

「3つの密」と「大声」は、リスクが高いとされることから注意する。

□ 「密閉(換気の悪い密閉空間)」の回避 ⇒ 換気の徹底

本ガイドライン P15 「換気」

□ 「密集(多数が集まる密集場所)」の回避 ⇒ 身体的距離の確保

本ガイドライン P16 「児童生徒等同士、教職員
—児童生徒等の身体的距離の確保」

□ 「密接(間近で会話や発声をする密接場面)」への対応 ⇒ マスクの着用

本ガイドライン P12 「マスクの着用」

5 健康観察の徹底

学校において感染源を絶つためには、外からできるだけウイルスを持ち込まないように努めることが重要となる。

(1) 家庭における登校前の検温・風邪症状の確認

□児童生徒等は、毎朝登校前に、家庭で検温と風邪症状の確認を行い、発熱や風邪症状がある場合は自宅で休養することを徹底する。

(同居の家族に発熱等があれば学校へ伝えていただく。感染経路の不明な感染者数が増加している地域では、同居の家族に発熱や風邪症状がある場合は、児童生徒等は登校を控えるよう依頼する。)

取組例：毎朝、児童生徒等の健康状態等について、家庭で「健康観察カード」(別紙1)を記入し、登校時に学校へ提出する。(学習支援ソフト等を活用する場合は、登校前に報告する。)

□以下について、別紙2等を活用し、保護者へ周知しておく。

【発熱等がある場合の相談】

・発熱等の症状がある場合は、まずは、日ごろ通院している医療機関か、自宅の近くにある医療機関に電話で相談する。

(直接、医療機関を受診せず、事前に必ず電話で相談すること)

・かかりつけ医がない等、相談先に困った場合はP7【相談窓口】に電話で相談する。

・次の<相談・受診の目安>にあてはまる場合は、すぐに相談する。

<相談・受診の目安>

少なくともいずれかに該当する場合は、すぐに相談する。

(該当しない場合も相談可)

◆息苦しさ(呼吸困難)、強いだるさ(倦怠感)、高熱等の強い症状のいずれかがある場合

◆基礎疾患等があり、発熱や咳などの比較的軽い風邪症状がある場合

◆上記以外で、発熱や咳など、比較的軽い風邪症状が続く場合

(症状が続く場合は必ず相談。症状には個人差があるため、強い症状と思う場合はすぐに相談。解熱剤等を飲み続けなければならない場合も同様)

- ・小児は小児科医による診察が望ましいとされ、かかりつけ小児医療機関や「千葉県発熱相談コールセンター」に相談する。
(ただし、検査についてはこれまでどおり医師が個別に判断する。)

【相談窓口】（かかりつけ医がない等、相談先に困った時）

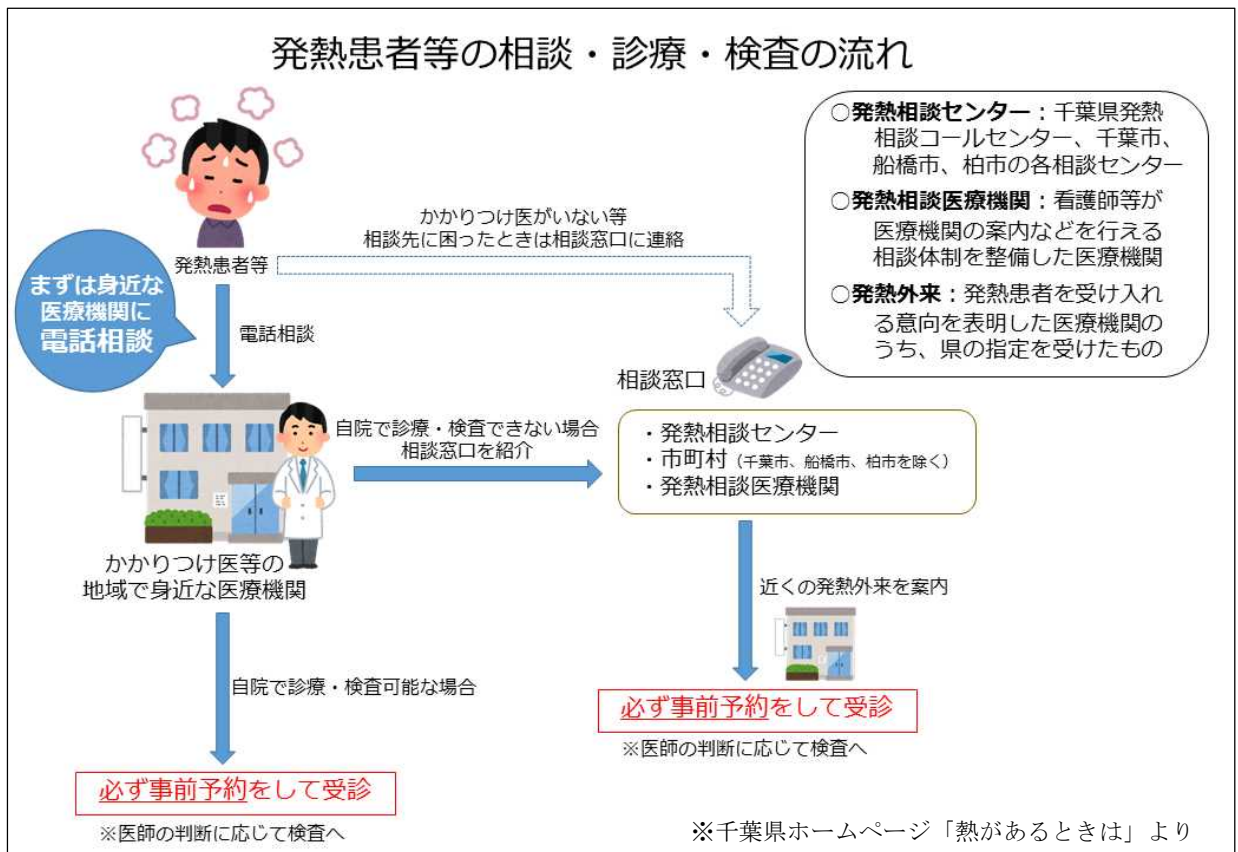
- ◆発熱相談センター
 - ・千葉県発熱相談コールセンター
 - ・千葉市・船橋市・柏市の各相談センター
- ◆市町村役場（千葉市・船橋市・柏市を除く）
- ◆発熱相談医療機関

※各相談窓口の電話番号等は千葉県ホームページ参照。

※「千葉県新型コロナウイルス感染症お問合せチャットボットサービス」（日本語、英語、中国語、韓国語、タイ語対応）でも、発熱相談窓口を案内。



【発熱等がある場合の相談・受診等の流れ】



(2) 学校における登校時の健康状態の確認

毎日、登校時、児童生徒等に発熱や風邪症状がないことを教職員が確認する。家庭で確認できなかった児童生徒等は、学校が定めた場所で、検温及び風邪症状の確認を行う。また、感染者発生時等に備え、健康観察の記録は学校で当月及び前月分を確実に保管する。

※確認できなかった児童生徒等が多数いる場合は複数の教職員で連携して対応する。



取組例:児童生徒等は、教室に入る前に、担任等に健康観察カードを提出する。カード等を忘れた、家庭で確認できなかった、再度確認したい等の児童生徒等は、教室に入る前に所定の場所に行き、担当の教職員が検温・風邪症状の確認を行う。(学習支援ソフト等を活用できる場合は、事前に、報告されたデータで健康状態を確認する。)

※高等学校の事例：P9 参照

学校で（登校時、登校後）

児童生徒等の発熱や風邪症状等を確認した場合

- ・児童生徒等の発熱や風邪症状等の体調不良を把握した時は、そのまま教室等に居続けさせることなく、すみやかに校内の所定の場所にて担当職員が検温や問診等の体調確認を行う。
なお、国から配付された「抗原簡易キット」を活用する際は、抗原簡易キットの活用の手引き*を十分確認すること。
(※令和3年9月6日付け教安772号
「抗原簡易キットの活用の手引きの周知について(通知)」参照)
- ・帰宅するまでの間、学校にとどまる場合は、他の人との接触を可能な限り避けられるよう、症状を考慮した上で、別室で待機させる等、配慮する。
- ・発熱や風邪症状等の児童生徒等を安全に帰宅させ、症状がなくなるまで自宅で休養させる。
- ・必要に応じて受診を勧め、その後、受診や検査の状況を確認する(受診の際はP6【発熱等がある場合の相談】を参考に、事前に必ず医療機関へ電話で相談するよう伝える。P6<相談・受診の目安>にあてはまる場合はすぐに相談するよう伝える)。

県立高等学校で行われている健康観察の事例

- 生徒は、登校時、昇降口にいる学年職員に健康観察カードを提示し、職員がその場で確認を行う。確認ができない生徒は、昇降口横の専用スペースにいる職員に申し出て、その場で検温・体調確認を受ける。(全日制)
- 生徒は、朝8時までに Web 上の専用アンケートフォームから健康状態を送信する。養護教諭が送信状況の一覧表を学年別にプリントアウトし、昇降口にいる各学年職員に渡す。昇降口にいる学年職員は、各生徒に健康状態を確認する際、未入力 of 生徒に対してその場で検温等を行う。(全日制)
- 登校時、健康観察カードの体調欄に記載がある生徒、体温が一定以上の生徒、カードを忘れた生徒、健康観察をしてきていない生徒は、昇降口にいる学年職員に申し出た後、保健室に行き養護教諭が聞き取り等を行う。それ以外の生徒は、教室入口の箱に健康観察カードを入れて入室し、朝の HR 時に担任・副担任が改めて点検する。(全日制)
- 学習支援ソフトにより、毎朝5時に自動配信されるアンケート(体温、健康状態等)に、生徒は朝8時までに回答する。担任、養護教諭、管理職は、Web 上かプリントアウトし回答された内容を確認し、体調不良等がある生徒については、登校時点で(すでに登校してしまっている場合は呼びに行き)、保健室(または専用の部屋)へ移動させて確認を行う。(全日制)
- 登校時、職員が昇降口で非接触型体温計を用いて全生徒の検温及び健康状態を確認し、対応した職員は全校生徒が一覧になった健康観察シートに結果を記録する。体調不良等の生徒は管理職と保健室へ報告し対応する。(定時制)

(3) 外部からの来校者に対する健康状態の確認

- 外部からの来校者に対し、来校前の検温及び健康状態の確認を依頼するとともに、必要に応じ、玄関等での検温等を実施する。
- 来校時に発熱や風邪症状が見られる場合には、校内への立ち入りや教育活動等への参加を見合わせていただく。
- 外部からの来校者に対し、マスク着用、手洗いや手指のアルコール消毒等、感染症対策の徹底を依頼する。

6 基本的な感染症対策の徹底

学校医・学校薬剤師等と連携し、保健管理体制を整備するとともに、教育活動全般を通じ、適切な消毒や清掃により、環境衛生を良好に保つよう努める。

また、変異株への対策としても、従来株と同様に、「3つの密」の回避、マスクの着用、手洗いなどの基本的な感染症対策の徹底に努める。

さらに、既にワクチンを接種した教職員や児童生徒においても同様に、基本的な感染症対策を継続する。

対策の主なポイント	
◆ウイルスを含む飛沫が 目、鼻、口の粘膜に付着するのを防ぐ	顔の粘膜 を守る
◆ウイルスが付着した手で 目、鼻、口の粘膜と接触するのを防ぐ	手をきれい にする



<対策別>

・石けんによる手洗い

□登校直後、トイレ使用后、共用の教材・教具・情報機器などを使用する前後、昼食前後等こまめに行う。

※手洗いを行う前に、目や顔を触らないよう、注意喚起する。

※手洗い場の数が十分でない場合もあることから、授業前後等は、手洗いの時間に配慮する。

□手洗い場には石けん等を配置し、児童生徒等が手洗いできる環境を整備する。

□手指用アルコール消毒液は、流水での手洗いができない際に補助的に用いられるものであることから、まずは、石けんによる手洗いを徹底し、手指用アルコール消毒液を設置できる場合には、補助的に使用する。

・ 咳エチケット

□他者に感染させないために、マスクの着用を基本とするが、咳・くしゃみをする際は、マスクの他ティッシュ・ハンカチ、袖、肘の内側などを使って、口や鼻をおさえるよう児童生徒へ指導する。

□マスクの着用

- ・マスクは正しい方法で着用する。(鼻と口を覆う。)
- ・最も高い効果があるとされる不織布マスクを着用することが望ましい。
- ・不織布マスクが最も高い効果を持ち、次に布マスク、その次にウレタンマスクの順に効果があるとされていることを、児童生徒及び保護者に適宜情報提供する。
- ・身体的理由で不織布マスクの着用が困難な場合もあることから、マスクの種類による偏見や差別が生じないように十分配慮する。
- ・マスクの取り外しについては、活動の態様や児童生徒等の様子なども踏まえ、現場で臨機応変に対応する(例:P19「登下校」)。特に、基礎疾患を有するためマスクの着用が困難である等の場合は、主治医や学校医とも相談の上、適切に対応する。
- ・マスク着用時は、のどが渇かなくても定期的に水分補給する等、脱水や熱中症に注意する。
- ・マスクがない、マスクを忘れた児童生徒等に対応できるよう、学校は可能な限り、予備用のマスクを準備しておく。
- ・無症状の感染者も他者へ感染させる恐れがあるので、学校教育活動においては、身体的距離が十分にとれないときは、飛沫を飛ばさないよう、次の場合を除いて基本的にマスクを着用する。

マスクを着用する必要がない場合

◆十分な身体的距離が確保できる場合

◆気温・湿度や暑さ指数(WBGT)が高い日

(熱中症などの健康被害が発生するおそれがある場合)

◎マスクを外す際は、できるだけ人との十分な距離を保つ、近距離での会話を控えるようにするなどの配慮をすることが望ましいが、熱中症も命に関わる危険があることから、熱中症への対応を優先する。

◎児童生徒等本人が暑さで息苦しいと感じた時などは、マスクを外したり、一時的に片耳だけにかけて呼吸したりするなど、本人の判断でも適切に対応できるよう指導する。

◎登下校中については、他の児童生徒等や一般の人と十分な身体的距離が確保できる場合。

◆体育の授業及び運動部活動

運動時は身体へのリスクを考慮し、マスクの着用は必要ない。特に、呼吸が激しくなる運動を行う際や、気温・湿度や暑さ指数(WBGT)が高い日には、十分な呼吸ができなくなるリスクや熱中症などの健康被害が発生するリスクがあるため、児童生徒の間隔を十分に確保するなどの十分な感染症対策を講じた上で、マスクを外す。また、気温・湿度や暑さ指数(WBGT)が高くない日に、呼吸が激しくならない軽度な運動を行う際、児童生徒等がマスクの着用を希望する場合は、マスクの着用を否定するものではないが、児童生徒等の体調の変化に十分注意する。

・学校施設や用具等の清掃及び消毒

普段の清掃及び消毒は、通常の清掃活動の中に、ポイントを絞って消毒の効果を取り入れる。児童生徒等の手洗いが適切に行われている場合には、必要に応じた作業のみとし、過度な消毒作業とならないよう留意する。

また、「新型コロナウイルスに対する有効性が認められた界面活性剤を含む家庭用洗剤」等を用いて、発達段階に応じて児童生徒が行っても差し支えない。

感染者が発生した場合は、P28（「消毒」）を参考に消毒を行う。

(1) 清掃及び消毒のポイント

□大勢がよく手を触れる箇所(ドアノブ、手すり、スイッチ他)

1日に1回、水拭きした後、**消毒液**※を浸した布巾やペーパータオルで拭く(P15、別紙3～6参照)。学校薬剤師等とも連携することが望ましい。

なお、児童生徒等の手洗いが適切に行われている場合には、これらの作業を省略しても差し支えない。

※消毒用エタノール、新型コロナウイルスに対する有効性が認められた界面活性剤を含む家庭用洗剤、次亜塩素酸ナトリウム消毒液(0.05%)、一定の条件を満たした次亜塩素酸水や亜塩素酸水を用いる。

□共用の教材・教具・器具・用具など

児童生徒等及び教職員ともに、使用の都度の消毒は不要であるが、使用前後の手洗いを徹底する。

□トイレや洗面所

「新型コロナウイルスに対する有効性が認められた界面活性剤を含む家庭用洗剤」を用いて、通常のコleaning活動の範囲で清掃する(特別な消毒作業は不要)。

下痢等でトイレが汚れた場合

「次亜塩素酸ナトリウム消毒液(0.1%)又は遊離塩素濃度100ppm(100mg/L)以上の亜塩素酸水消毒液」で、便器・便座・ドアノブ・流水レバー・トイレットペーパーホルダーなどを消毒する。(次亜塩素酸ナトリウム消毒液は、感染性胃腸炎にも有効。児童生徒等には扱わせないこと。)

□机・椅子

衛生環境を良好に保つため、清掃活動において、「新型コロナウイルスに対する有効性が認められた界面活性剤を含む家庭用洗剤」を用いて拭き掃除を行うとよい(特別な消毒作業は不要)。

□清掃用具等

衛生状態を良好に保ち、劣化に注意する。

□十分な換気やマスク着用等の感染症対策を講じる。作業後は石けんによる手洗いを十分に行う。

(2) 消毒について

【注意事項（各消毒液共通）】

- 消毒作業中は換気を十分に行い、目、鼻、口、傷口などを触らない。
- 消毒液をペットボトル等の容器に入れる際は、誤って飲むこと等がないよう、容器に消毒液であることを明記し、児童生徒等の手が届かない場所に置く。
- 人がいる環境で、空間噴霧しない（吸入や目・皮膚への付着による健康被害の恐れあり）。

※各消毒液の詳細は、別紙3～6を参照のこと

・換気

「密閉」の回避に加え、「3つの密」と「大声」にも注意し、換気の徹底を図る。特に、冬場は空気が乾燥し飛沫が飛びやすくなるため、徹底して換気に取り組む。

- 気候上可能な限り、常時換気に努める（常時換気が難しい場合は30分に1回以上、数分間程度、窓を全開する。それも難しい場合は、少なくとも休み時間ごとに窓を全開する）。
- 換気は、教室の窓側と廊下側など、2方向の窓（やドア）を同時に開けて行い、廊下の窓も開ける。
- 窓（やドア）を開ける幅は10cm～20cm程度を目安とし、上の小窓や廊下側の欄間を全開にするなどの工夫も考えられる。
- 窓のない部屋では、常時入口を開けておいたり、換気扇を用いたり、扇風機等で部屋の外に空気が流れるようにする等、換気に努める。
- 冷暖房使用時においても換気は必要。（冷房時は換気で室内温度が高くなるので、エアコンの温度設定をこまめに調整する。）

- 換気扇等の換気設備がある場合は、常時運転する。ただし、換気設備だけでは換気能力が足りず、窓開け等による自然換気と併用が必要な場合が多いことに注意する。換気設備は清掃を行う。
- 換気に伴う室温低下で健康被害が生じないように、校内での保温・防寒目的の衣服の着用について柔軟に対応する。児童生徒等及び保護者に温かい服装を心がけるよう十分周知しておく。
- 適度な加湿はウイルス飛散防止の一助となるが、マスクを着用している場面が多いことなどに鑑み、無理のない範囲で取り組む。

・児童生徒等同士、教職員－児童生徒等の身体的距離の確保

換気や咳エチケット等を行った上で、

- 児童生徒等の座席の間に、可能な限り距離を確保する（おおむね1～2m）。
- 対面とならないような形で教育活動を行うことが望ましい（授業・給食等）。
- 座席等を使用しない場合であっても、身体的距離（おおむね1～2m）を確保して対応することが望ましい。

・その他

- 発熱や風邪症状の見られる児童生徒等の対応にあたる教職員は、マスクを着用し、必要に応じて使い捨て手袋、ゴーグル、フェイスシールド等を着用する。対応後は、手洗い等を行う。使い捨てできない物（ゴーグル、フェイスシールド等）は、適切に消毒する。
- 発熱や風邪症状の見られる児童生徒等の対応にあたり、保健室以外に別室を設けることが難しい場合は、保健室内をついたて等で区切り対応エリアを分ける等により、他の児童生徒等（ケガ、心身の不調等）と可能な限り接しないようにする。

- 医療的ケアを必要とする児童生徒等や基礎疾患を有する児童生徒等の登校や校内での活動等については、主治医や保護者等と連携を密にし、一人一人の状況に応じた適切な支援が図られるよう、より慎重な対応を行う。
- 特別支援学校等における新型コロナウイルス感染症対策については、以下も参考とする。
 - ・「特別支援学校等における新型コロナウイルス感染症対策に関する考え方と取組について（通知）」（令和2年6月19日 文部科学省）
- トイレ内はよく換気する。フタがあるトイレの場合は、フタを閉めて水を流す。

感染症対策下における熱中症対策

- 体が暑さに十分慣れていない、疲れがたまっている等の状況も予想される中、感染症対策を行いつつも、例年以上に熱中症予防に努める。

＜対策ポイント＞

- ・エアコンのある教室等を中心に活動する。
- ・冷房時でも換気は必要であり、換気で室内温度が高くなるので、エアコンの温度設定をこまめに調整する。
- ・マスクを着用している場合は、強い負荷の作業等を避け、のどが渇かなくても定期的な水分補給を心掛ける。
- ・身体的距離が十分にとれないときは、基本的にはマスクを着用するが、マスクを着用する必要がない場合についてはP13を参照。
- ・毎日の検温や風邪症状を含めた体調の確認は、熱中症予防においても有効。体調が悪いと感じた時は、無理せず自宅で休養する。

＜従来からの対策の徹底＞

- ・暑さ指数（WBGT*）等を参考に、無理のない範囲で活動（急に暑くなった時は要注意）
- ・活動前、活動中、活動後の適切な水分・塩分の補給
- ・個人の条件（体調や体力）を十分に考慮 など

※WBGT33℃以上で熱中症警戒アラートが発表される。

- 熱中症を疑って救急搬送（または医療機関で受診）する際は、正確な情報提供を行う。

熱中症が疑われるのか、それとも新型コロナウイルス感染症が疑わしいのか等、医療機関における判断の一助となるよう、救急隊（または医療機関）に対し、可能な範囲で正確な情報を伝える。

＜伝える情報の例＞

- ・ 基本情報（いつ、誰が、どうして、どのような状態か、持病等）
- ・ 行っていた教育活動とその活動環境
※倒れたり症状が現れた時の現場の状況を伝えることが重要。
（活動内容、時間、場所、天気、気温・室温、湿度 等）
- ・ 当日までの健康状態等（発熱、風邪症状、その他症状等）
（例：3～4日前に風邪症状あり、濃厚接触者である 等）
- ・ 家族の状況（家族が発熱中、家族が濃厚接触者である 等）

<場面別>

教職員の目が届きにくい場面（登下校、休み時間、校内での移動時、部活動の準備・片付けなど）においても、3つの条件（密閉、密集、密接）が発生しないよう、児童生徒等に感染症対策の考え方を理解させるとともに、必要に応じて、ルール設定、放送や掲示物の活用など、指導の工夫を図る。

各教育活動の詳細については、P24の[参照通知]に掲載の各通知内容によること。

・ 登下校

- 校門や昇降口での密集が起こらないよう、動線を工夫する。
- 気温・湿度や暑さ指数(WBGT)が高い時は、他の児童生徒等や一般の人と十分な身体的距離が確保できる場合はマスクを外すよう指導する。小学生など、マスクを外してよいか判断が難しい子供へは、積極的に声かけ等を行う。その際、人と十分な距離を確保し、会話を控えることも指導する。
- 公共交通機関を利用する場合は、特に、手で目や顔を触らないよう注意し、降車後（または学校到着後）は速やかに手を洗う。
- 飲食店や遊興施設等への立ち寄りや寄りかたは慎み、やむを得ない場合を除き、自宅と学校間は直行直帰をするよう指導する。

・ 特別支援学校スクールバス

- 児童生徒等の状況に配慮しつつ、エアコンの外気導入や定期的な窓開け等による換気を行う。
- 通路側の席を空けたりビニールカーテンで座席を区切ったりする等して、児童生徒等同士の身体的距離の確保に努める。
- スクールバス内の密集を避けるために、保護者の負担等も考慮しながら引き続き送迎を依頼する。
- スクールバスの運行にあたっての留意事項

- ・ スクールバス内の消毒(手すり、窓座席等児童生徒がよく触れるところ)
- ・ 家庭での健康チェックの徹底(乗車前に体温、咳等を健康カードにて確認)
- ・ 乗車前後の石けんによる手洗いや消毒液による手指の洗浄
- ・ 乗車中のマスクの着用(着用できない児童生徒はこの限りではない)
- ・ バス停などでのこまめな車内換気
- ・ 運行時間の短縮(バス停の集約等)

・ 各教科活動等

次に示すような活動については、本県又は地域の感染状況に応じて、その実施方法を検討することとし、具体的な対応については、関連通知によるものとする。(P24の[参照通知])

【感染症対策を講じてもなお感染のリスクが高い教育活動の例】

- ・ 各教科等に共通する活動として「児童生徒が長時間、近距離で対面形式となるグループワーク等」及び「近距離で一斉に大きな声で話す活動」
- ・ 理科における「児童生徒同士が近距離で活動する実験や観察」
- ・ 音楽における「室内で児童生徒が近距離で行う合唱及びリコーダーや鍵盤ハーモニカ等の管楽器演奏」
- ・ 図画工作、美術、工芸における「児童生徒同士が近距離で活動する共同制作等の表現や鑑賞の活動」
- ・ 家庭、技術・家庭における「児童生徒同士が近距離で活動する調理実習」
- ・ 体育、保健体育における「児童生徒が密集する運動」や「近距離で組み合ったり接触したりする運動」
- ・ 職業等に関する授業における対面による製品等の販売会

- 教室等の活動場所は、P15「換気」に従い、換気の徹底を図る。
- 身体的距離が十分にとれないときは、飛沫を飛ばさないよう、基本的にはマスクを着用する*。(※マスクを着用する必要がない場合等についてはP13参照。)
- 教職員は飛沫をとばさないようマスクを着用し、児童生徒等と可能な限り身体的距離（おおむね1～2m）の確保に努める。
- マスク着用時は、のどが渇かなくても定期的に水分補給する等、脱水や熱中症に注意する。
- 教材・教具・器具・用具などを共用で使用する場合は、児童生徒等及び教職員ともに、使用前後の手洗いを徹底するものとし、使用の都度の消毒は不要であるが、1日1回程度、消毒を行うことが望ましい。
- 特別支援学校における自立活動や日常生活に関する指導等については、児童生徒等との身体的接触がやむを得ないことから、例えば、児童生徒等にかかわる者を限定する等、指導方法や内容を工夫する。

・ 給食、昼食等を含む飲食する場面

- 飲食する際は、飛沫飛散防止のため、机を向かい合わせにしない、大声を出さない、身体的距離がとれない場合は会話を控える。食事後等に歓談する際は必ずマスクを着用する。
- 特に高等学校では、教室以外で飲食する場合も想定されるが、向かい合わせに座らない、車座にならない、身体的距離がとれない場合は会話を控える、飲み物・食べ物・ストロー等を共有しない、飲食時以外はマスクを着用する等について、確実に指導する。
- 給食当番だけでなく、全ての児童生徒等が食事の前の手洗いを徹底する。
- 食堂の利用は、時間差を設けたり、場所を分散したりする等の工夫をする。

- 給食の配膳を行う児童生徒等及び教職員は、手洗いを徹底し、マスクを着用する。また、下痢、発熱、腹痛、嘔吐等の症状の有無、衛生的な服装をしているか、手指は確実に洗浄したか等、給食当番活動が可能であるかを毎日点検し、適切でないと認められる場合は給食当番を代えるなどの対応をとる。
- 配膳時の密集・密接を避けるため、必要があれば献立の品数を減らすことも考えられるが、その場合、適切な栄養が摂取できるように工夫する。
- 食後等に、学校で歯磨きや洗口を行う場合は、換気の良い環境で、児童生徒等がお互いに距離を確保し、飛沫が飛び散らないよう注意しながら行うよう指導するなど、感染リスクに配慮する。

・ 休み時間

- 教室等の窓（やドア）を大きく開放し、十分な換気を行う。
- 特別教室やグラウンド等での活動後やトイレ使用后等、手洗いを徹底する。
- 3つの条件（密閉、密集、密接）が発生しやすい場面であり、休み時間中の行動について、必要に応じてルールを設定する等、指導の工夫をする。
- 他学級の児童生徒同士が集まることを控えるよう指導する。

・ 清掃活動

- マスクを着用して行うとともに、清掃後は石けんを使用して手洗いをを行う。
- 窓やドアを大きく開放し、十分な換気の下で行う。

・ 図書館（図書室）、パソコン室など

- 利用の前後に手洗いをするというルールを徹底する。
- 室内で、児童生徒等の密集が生じないように、利用方法を工夫し、換気、身体的距離が十分にとれない場合のマスク着用など基本的な感染症対策に努める。

・ 寄宿舍

- 「寄宿舍における新型コロナウイルス感染症への対応について」（令和2年5月22日 千葉県教育委員会）を参考とする。

・ 学校行事

- 地域の感染状況等を踏まえ、実施に当たっては、感染症対策を確実に講じるとともに、活動の内容や方法、実施の時期や場所等について工夫する。

・ 修学旅行

- 「令和3年度修学旅行の実施における留意点について（通知）」（令和3年6月1日 千葉県教育委員会）を参考とする。

・ 部活動

- 活動前後の手洗い・消毒の徹底、また、屋内で実施する場合は、換気を徹底するとともに、多数の者が密集しないよう十分留意する。
- 部室や更衣室等の密になりやすい場所では、マスクの着用を徹底する。やむを得ず更衣等でマスクを外す場合は、身体的距離を確保し会話はしない、マスクを外す時間は極力短くする等の使用ルールを明確にし、遵守させる。

- 同じ部活動に所属する生徒等が食事する際なども含め、部活動内外を問わず感染症対策を徹底する。
- 公式大会への参加については、令和3年5月21日付け教学指第288号他「新型コロナウイルス感染症の感染者が発生している県立学校における部活動の大会参加について（通知）」によるものとする。

〔参照通知〕

上記の他、各教育活動の詳細については、以下に示すこれまでの通知を参照すること。

- ◇本県に、「緊急事態宣言」が発令されている場合の教育活動等
「緊急事態宣言の延長に伴う同宣言期間中の県立学校の教育活動等について（通知）」
(令和3年9月9日付け教学指第760号、教特第512号、教安第789号、
教体第527号)
- ◇本県が、「まん延防止等重点措置」を実施すべき区域とされた場合の教育活動等
「まん延防止等重点措置の適用に伴う県立学校の対応について（通知）」
(令和3年4月19日付け教学指第118号、教特第71号、教安第95号、
教体第73号)
- ◇「緊急事態宣言」や「まん延防止等重点措置」が解除された場合
「緊急事態宣言の解除に伴う県立学校の教育活動等について（通知）」
(令和3年9月29日付け教学指第873号、教特第574号、教安第870号、
教体第571号)

なお、今後の感染状況等の変化によって、上記通知の内容が更新された場合は、新たな通知によること。

7 感染者等が発生した場合の対応

以下のチェック項目を参考に、対策本部を中心として教職員で分担して対応にあたる。なお、平時から、感染者発生時に保健所へ直ちに情報提供できるよう資料等を準備しておく（参考：P26 提供資料例）。

(1) 感染者が発生した場合の対応

感染者が発生した場合、学校には、通常、本人（や保護者）から感染が判明した旨の連絡がされる。また、学校での感染拡大の可能性がある場合には、保健所から連絡が入る。

ア 初動対応

【児童生徒等又は教職員の場合】

- 感染した児童生徒等については、保健所が指示する期間、学校保健安全法第19条に基づく出席停止とする。感染者が教職員の場合は、療養休暇の取得により出勤させない。（P32 参照）
- 感染者の発生を把握後、管理職は速やかに教育委員会に電話報告する。
 - ・ 県立学校→学校危機管理担当
 - ・ 市町村立学校→市町村教育委員会→教育事務所→学校危機管理担当
- 対策本部の招集、全教職員への連絡を行う。
- 感染者本人に関わる情報を速やかに収集する。
保健所の指導の下、本人のプライバシーに配慮し、学校が把握できる範囲で本人の行動履歴等を時系列で速やかに整理する。

児童生徒等の場合

健康状態（発症日、症状等）、クラス、部活、通学手段、出席状況
発症2日前の行動履歴（部活動の状況、授業等の状況、休憩・昼食時の状況、校外活動の状況）、学校のスケジュール等

教職員の場合

健康状態（発症日、症状等）、教科、クラス、部活、分掌、通勤手段、勤務状況、発症2日前の行動履歴（部活動の状況、授業等の状況、休憩・昼食時の状況、校外活動の状況）、学校のスケジュール等

- 学校医等へ感染者発生を報告する。
- 保健所との対応窓口は原則、管理職とし、保健所へ連絡する。
- 保健所への速やかな情報提供により、保健所の行う「濃厚接触者や検査対象者(以下、「濃厚接触者等」)の特定」に協力する。保健所の指導の下、感染者本人の行動履歴に基づき、児童生徒等及び教職員の接触者のリスト等を速やかに作成し、直ちに保健所へ情報提供を行う。

＜提供資料例＞

関係者名簿（クラス別、授業別、部活動別、教職員、マスクを外して接触した者*）、健康観察記録（児童生徒等及び教職員）、校内の感染症対策の状況（マスクの着用状況、昼食時の様子、消毒・換気・手洗い等の状況）、座席表、時間割表、校舎配置図、学校行事に係る資料、スクールバス乗車名簿 等
*食事を共にした、体育や部活動で活動を共にした等

- 保健所の指導の下、対策本部は教育委員会等と連携して、今後の対応を検討する。

○臨時休業の判断について

教育委員会は、感染者が発生した場合、保健所により濃厚接触者等が特定されるまでの間、学校保健安全法第20条に基づく臨時休業の要否を判断し、必要と判断される場合は臨時休業を実施する。

〔休業1〕感染者発生～濃厚接触者等の特定までの間

感染者発生から濃厚接触者等の特定まで、まずは臨時休業(学級閉鎖、学年閉鎖、学校全体の臨時休業又は学部閉鎖)の要否を検討する。ただし、感染が広がる可能性が低い場合には、臨時休業を行わない場合もある。



〔休業2〕濃厚接触者等の特定後5～7日間程度の間

学校の感染状況と休業2の取扱いの目安(P27参照)を踏まえ、学校長と県教育委員会の協議の上、その後の臨時休業(学級閉鎖、学年閉鎖、学校全体の臨時休業又は学部閉鎖)を判断する。ただし、濃厚接触者等がいらないなど学校内で感染が広がる可能性が低い場合には、休業2の臨時休業を行わない。

※管轄の保健所の業務が逼迫している状況にある場合の濃厚接触者等の特定及び臨時休業の判断等については、「学校で児童生徒や教職員の新型コロナウイルスの感染が確認された場合の対応ガイドラインの送付について(通知)」(令和3年8月31日付け教安第749号)によるものとする。

○臨時休業の範囲と期間について

(1)「休業1」の範囲について(概ね数日～1週間程度)

感染者が発生した場合、原則として、濃厚接触者等が特定され、休業2の要否を判断するまでの間、学校保健安全法第20条に基づく臨時休業を行うこととし、複数の学年で感染者が発生した場合は学校全体の臨時休業、単一の学年で発生した場合は学年閉鎖とする。

ただし、例えば感染経路が家庭内であり、感染者の校内での接触者が極めて少ない場合など、感染が学級を越えて校内で広がる恐れがないと判断される場合は、学級閉鎖等とすることもある。

(2)「休業2」の範囲について(5～7日間程度)

ア 学級閉鎖

○以下のいずれかの状況に該当し、学級内で感染が広がっている可能性が高い場合、学級閉鎖を実施する。

- ①同一の学級において複数の児童生徒等の感染が判明した場合
- ②感染が確認された者が1名であっても、周囲に未診断の風邪等の症状を有する者が複数いる場合
- ③1名の感染者が判明し、複数の濃厚接触者が存在する場合
- ④その他、学校長と教育委員会との協議により必要と判断した場合
(※ただし、学校に2週間以上来ていない者の発症は除く。)

○学級閉鎖の期間としては、5～7日程度を目安に、児童生徒等の健康状態等を踏まえて判断する。

イ 学年閉鎖

○複数の学級を閉鎖するなど、学年内に感染が広がっている可能性が高い場合、学年閉鎖を実施する。

ウ 学校全体の臨時休業又は学部閉鎖

○複数の学年を閉鎖するなど、学校内や学部内で感染が広がっている可能性が高い場合、学校全体の臨時休業又は学部閉鎖を実施する。

- 臨時休業を行う場合等は、保護者宛て連絡内容を検討し、緊急メール等を活用して、児童生徒等の自宅待機等について連絡するとともに、各学年主任等は臨時休業中の健康観察や学習課題等を児童生徒等に連絡する。

- 他の児童生徒等及び教職員の健康状態を改めて確認するとともに、欠席者等の受診・PCR検査等の状況を確認する。
- 感染者の家庭と連絡を取り、状況に応じて支援に努める。
- 必要な場合は、学童や放課後デイサービスへ連絡する。
- 教職員の勤務体制を整備する。(教職員に濃厚接触者等がいる場合を想定)
- 報道対応の窓口を決定し、教育委員会と連携し情報を収集・整理する。

イ その他

【児童生徒等又は教職員の場合】

- 感染拡大防止の必要上、感染者が明らかになることもあるが、その場合においても、差別・偏見・いじめなどの対象とならないよう、十分な配慮や注意を行う。
- 県立学校にあっては、続報（濃厚接触者等の特定状況・検査結果など）を県教育委員会に電話報告する（管理職→学校安全保健課保健班）。
- 濃厚接触者等へ適切な対応を実施する。
保健所から、濃厚接触者等とされた者は、自宅待機を行い、保健所の指示に従う。
- 消毒
 - ・保健所等の指導の下、消毒エタノール、次亜塩素酸ナトリウム消毒液（0.05%）又は遊離塩素濃度 25ppm（25mg/L）以上の亜塩素酸水消毒液を使用し、感染者本人の行動範囲を考慮し、接触箇所（可能性のある箇所を含む）等、校内の消毒を行う（必ずしも専門業者を入れて施設全体を行う必要はない）。
 - ・トイレについては、消毒エタノール、次亜塩素酸ナトリウム消毒液（0.1%）又は遊離塩素濃度 100ppm（100mg/L）以上の亜塩素酸水消毒液を使用し消毒する。
 - ・物の表面でのウイルスの生存期間（およそ 24 時間～72 時間）を考慮し、消毒ができていない場所や物は、立ち入りや使用を禁止するなどの処置も考えられる。

(2) 濃厚接触者が発生した場合の対応

学校には、通常、本人（や保護者）から濃厚接触者に特定された旨の連絡がされる。

【児童生徒等又は教職員の場合】

- 濃厚接触者（候補者として指定した者を含む。以下同じ）について、保健所が自宅待機などを求めた期間、学校保健安全法第19条に基づく出席停止とする。濃厚接触者が教職員である場合は、職務の専念義務の免除により出勤させないようにする。（P32 参照）
- 濃厚接触者の発生を把握後、状況に応じて対策本部を招集し、全教職員への連絡を行う（教育委員会への報告は原則不要）。
- 保健所との対応窓口は原則、管理職とし、必要に応じて保健所へ連絡する。
- 対策本部は、その後、濃厚接触者本人の「感染」が判明した場合に、直ちに保健所へ情報提供し、速やかな濃厚接触者等の特定につながるよう、本人の行動履歴に基づき、資料を準備しておく。

＜準備資料例＞

関係者名簿（クラス別、授業別、部活動別、教職員、マスクを外して接触した者※）、健康観察記録（児童生徒等及び教職員）、校内の感染症対策の状況（マスクの着用状況、昼食時の様子、消毒・換気・手洗い等の状況）、座席表、時間割表、校舎配置図、学校行事に係る資料、スクールバス乗車名簿 等

※食事を共にした、体育や部活動で活動を共にした等

- 濃厚接触者等が、差別・偏見・いじめなどの対象とならないよう、十分な配慮や注意を行う。
- 必要に応じて、保健所の指導の下、他の児童生徒等の健康観察を行う。

- 症状のない濃厚接触者等が触った物品に対する消毒は不要とされるが、必要に応じて、保健所等の指導の下、消毒用エタノール、次亜塩素酸ナトリウム消毒液（0.05%）又は遊離塩素濃度 25ppm（25mg/L）以上の亜塩素酸水消毒液を使用し、濃厚接触者本人の行動範囲を考慮し、接触箇所（可能性のある箇所を含む）等、校内の消毒を行う。
- 濃厚接触者等の PCR 検査等の結果が陽性だった場合は、速やかに （1）感染者が発生した場合の対応（P25） へ移行する。

(3) 感染が疑われる者*が発生した場合の対応

※医師や保健所の指示等により、新型コロナウイルス感染症を診断するためのPCR検査等を受ける者。

【児童生徒等又は教職員の場合】

- 感染が疑われる者の発生を把握後、状況に応じて対策本部を招集し、必要に応じて全教職員への連絡を行う（教育委員会への報告は不要）。
- 対策本部は、その後、感染が疑われる者本人の「感染」が判明した場合に、直ちに保健所へ情報提供し、速やかな濃厚接触者等の特定につながるよう、本人の行動履歴に基づき、資料を準備しておく。

＜準備資料例＞

関係者名簿（クラス別、授業別、部活動別、教職員、マスクを外して接触した者*）、健康観察記録（児童生徒等及び教職員）、校内の感染症対策の状況（マスクの着用状況、昼食時の様子、消毒・換気・手洗い等の状況）、座席表、時間割表、校舎配置図、学校行事に係る資料、スクールバス乗車名簿 等
※食事を共にした、体育や部活動で活動を共にした等

- PCR検査等の結果が判明するまで、学校保健安全法第19条に基づく出席停止とすることが可能。
(教職員の服務はP33参照)
- 感染が疑われる者が、差別・偏見・いじめなどの対象とならないよう、十分な配慮や注意を行う。
- PCR検査等の結果が陽性だった場合は、速やかに(1)感染者が発生した場合の対応 (P25)へ移行する。
- PCR検査等の結果、感染が確認されなかった場合の登校・出勤の可否については、医師・保健所等の指示に従う。

(4) 出席停止等の取扱い(感染・濃厚接触者以外の場合を含む)

児童生徒等の出席停止等の取扱いは、原則として以下のとおりとする。
 なお、参考として教職員の場合の服務を示すが、詳細は教育委員会へ確認すること。

状 況		児童生徒等の出席停止等の取扱い	教職員
(1)	感染が判明した場合	治癒するまで（保健所が指示する期間）、「学校保健安全法第19条に基づく出席停止」とする。	療養休暇 <small>（臨時的任用職員・会計年度任用職員は特別休暇により取り扱うことができる）</small>
(2)	濃厚接触者等に特定された場合	保健所が自宅待機などを求めた期間（感染者と最後に濃厚接触をした日の翌日から2週間が基本）、「学校保健安全法第19条に基づく出席停止」とする。 <small>（文部科学省：学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル 2020.12.3Ver5より）</small>	職務に専念する義務の免除
(3)	発熱や風邪症状が見られる場合 <small>（ワクチン接種による副反応が出た場合も同じ）</small>	「学校保健安全法第19条に基づく出席停止」とする。 <small>（文部科学省：学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル 2020.12.3Ver5より）</small>	特別休暇
(4)	児童生徒等に症状等はないが、同居する家族に発熱や風邪症状が見られる場合	感染経路の不明な感染者数が増加している地域では、 「学校保健安全法第19条に基づく出席停止」とすることが可能である。 <small>（文部科学省：学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル 2020.12.3Ver5より）</small>	特別休暇 <small>（当該職員が勤務しないことがやむを得ないと認められる場合に限る。）</small>
(5)	同居する家族が、濃厚接触者に特定された場合	PCR検査等の結果が判明するまで、「学校保健安全法第19条に基づく出席停止」とすることが可能である。	特別休暇

状 況		児童生徒等の出席停止等の取扱い	教職員
(6)	児童生徒等又は同居の家族が、濃厚接触者ではないが、医師や保健所の指示等でPCR検査等を受けた場合	PCR検査等の結果が判明するまで、「学校保健安全法第19条に基づく出席停止」とすることが可能である。	特別休暇
(7)	医療的ケアが日常的に必要な児童生徒等や基礎疾患等のある児童生徒等が主治医や学校医に相談の上、登校すべきでないと判断された場合	「非常変災等児童生徒又は保護者の責任に帰すことのできない事由で欠席した場合などで、校長が出席しなくてもよいと認めた日」とする。 <small>(文部科学省:学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル 2020.12.3Ver5 より)</small>	教職員本人に症状有: 特別休暇 (診断書等あれば療養休暇)
(8)	海外から帰国・再入国し、一定期間自宅等での待機を要請された場合	その期間は、「学校保健安全法第19条に基づく出席停止」とする。(その後、健康状態に問題がなければ登校可) <small>(文部科学省:教育活動の実施等に関するQ&A、新型コロナウイルス感染症に対応した持続的な学校運営のためのガイドライン令和3年 2月19日改訂 より)</small>	検疫法第16条第2項に規定する停留(これに準ずるものを含む。)の対象となった場合: 特別休暇
(9)	児童生徒が医療機関等においてワクチン接種を受ける場合	「非常変災等児童生徒又は保護者の責任に帰すことのできない事由で欠席した場合などで、校長が出席しなくてもよいと認めた日」とすることが可能である。	職務に専念する義務の免除

状 況	児童生徒等の出席停止等の取扱い	教職員
(10)	<p>児童生徒等に症状等はないが保護者から感染が不安で学校を休ませたいと相談された場合</p> <p>例えば、生活圏において感染経路不明の患者が急激に増えている地域で、同居家族に高齢者や基礎疾患がある者がいるなどの事情があつて、他に手段がない場合など、合理的な理由があると校長が判断する場合、その他校長が必要と認める場合 →「非常変災等児童生徒又は保護者の責任に帰すことのできない事由で欠席した場合などで、校長が出席しなくてもよいと認めた日」とする。</p> <p><small>(文部科学省:新型コロナウイルス感染症に対応した持続な学校運営のためのガイドライン令和3年2月19日改訂 参考)</small></p>	

<参考>

校長は、新型コロナウイルス感染症にかかっている、かかっている疑いがある、又はかかるおそれのある児童生徒等があるときは、学校保健安全法に定める第一種感染症として、治癒するまで出席を停止させることができる。

【学校保健安全法第19条、令和2年1月31日付け文部科学省事務連絡より】

8 児童生徒等への正しい知識等の指導と心のケア

児童生徒等が、新型コロナウイルス感染症及びその感染予防対策について正しい知識を身に付け、自ら感染のリスクを避ける行動をとることができるよう、指導資料[※]等を活用し、発達段階に応じた指導を行う。

また、中学校及び高等学校等、年齢が上がるにつれ、教職員の直接的な監視下にはない行動や、自主的な活動が増えることから、生徒自ら衛生管理に留意するよう指導する。

特に、昼食を含む飲食の場面、部室や更衣室等でマスクを外した場面、下校時の飲食等について指導の徹底が求められる。指導に当たっては、当事者意識を高め、自身の適切な行動により学校から感染者を出さない、広げないという自覚と実践に向けた心の醸成に努めることとする。

かけがえのない
いま
学校生活を守るために

私にできること

昼食時は 黙食・個食

着替えは 十分な距離で

部活後は 寄り道せずに

日頃から マスク・手洗い 距離確保

マスクを外した時、最も感染リスクが高まります。マスク着用やこまめな手洗いなどの小さな行動の積み重ねにより、かけがえのない学校生活を守っていきましょう。

千葉県教育委員会

令和3年5月10日教安第200号 指導資料

<※指導資料 指導内容の例>





- 手洗いは接触感染を予防するのに効果があること。
- 手洗いは正しい方法で行わないと予防にならないこと。
- 飛沫感染を防ぐためにも、何もせずに咳やくしゃみをしたり、咳やくしゃみを手でおさえたりせずに、3つの咳エチケットを実践すること。
 - <3つの咳エチケット>
 - ① マスクを着用する。(口・鼻を覆う。)
 - ② マスクがないときは、ティッシュやハンカチで口・鼻を覆う。
 - ③ マスクがなく、とっさの時は袖で口・鼻を覆う。
- 感染症を予防するには、運動、食事、休養及び睡眠の調和のとれた生活を続けることが有効であること。
- 私たち一人一人が、感染症を予防するためにできることをしっかりやっていくことが大切であり、自分の生活や体調を振り返り行動することが感染拡大防止にもつながること。
- 3つの密が重ならない場合でも、リスクを低減するため、できる限り「密閉」「密集」「密接」しないようにすること。
- SNSで氾濫しているデマや誤った情報に惑わされないよう注意すること。
- 心配なことがあったら、一人で抱え込まずに、周囲の人に相談すること。
- 感染者、濃厚接触者等、医療従事者、社会機能の維持にあたる方等とその家族に対する誤解や偏見に基づく差別は許されないこと。

※『新型コロナウイルス感染症の予防～子供たちが正しく理解し、実践できることを目指して～』(令和2年4月 文部科学省)

https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/08060506_00001.htm

<その他 指導例>

- 例えば、マスクをしていない、咳をしている、登校時における検温で熱がある、医師の指示等により出席を控えているなどの児童生徒等への偏見や差別が生じないように、新型コロナウイルス感染症に関する適切な知識を基に、発達段階に応じた指導を行う。
- ワクチン接種は任意のものであることを前提に、ワクチンの接種を受ける又は受けないことによって、差別やいじめなどが起きることのないよう別紙7のリーフレット等を活用し、次の点について指導する。
 - ◆ワクチン接種をしたかどうか、無理に聞かないこと。
 - ◆ワクチン接種をしようとしている人に、接種をやめるよう言わないこと。
 - ◆ワクチン接種をしていない人に、接種を無理強いしないこと。
 - ◆ワクチン接種をしたこと、していないことを理由とした、仲間外れやいじめは絶対にしないこと。「新型コロナワクチンの接種に係るいじめの防止について（通知）」（令和3年9月16日付け教児生第27号、教安第818号）参照
- ワクチン接種について、偏った情報でなく、信頼できる情報を得るようにする。

厚生労働省 新型コロナワクチン Q&A  https://www.cov19- vaccine.mhlw.go.jp/qa/	県医師会推奨 こびナビ  https://covnavi.jp
---	--

- 児童生徒等の心のケアは重要であることから、きめ細やかな健康観察等により児童生徒等の状況を的確に把握するとともに、学校医と連携した健康相談等の実施、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等による心理面および福祉面からの支援等、関係教職員が組織的に対応すること。また、相談窓口（「24時間子供SOSダイヤル」やSNS相談窓口等）を適宜周知すること。

9 教職員の感染症対策の徹底等

多数の児童生徒等と接する立場にあることから、日頃から体調管理に努め、職場はもとより職場外でも感染症対策の徹底に努める。

特に、医療的ケアを必要とする児童生徒等や基礎疾患を有する児童生徒等と接する機会がある教職員においては、感染リスクの高い場所に行く機会を減らす等、一層の感染対策を行う。

□教職員の感染経路の多くが「不明」である現状を踏まえ、教職員が学校で感染を広げることがないように、職場外の活動においても、換気が悪く人が密に集まって過ごすような空間に集団で集まることを避ける等、十分注意する。

□毎日、出勤前に必ず検温と風邪症状の確認を行い、発熱や風邪症状がある場合は、出勤を控え、管理職等へ連絡する。

□発熱等の症状がある場合は、まずは、日ごろ通院している医療機関か、自宅の近くにある医療機関に電話で相談する（直接、医療機関を受診せず、事前に必ず電話で相談すること）。かかりつけ医がない等、相談先に困った場合はP7【相談窓口】に電話で相談する。P6＜相談・受診の目安＞にあてはまる場合は、すぐに相談すること。

□出勤時、管理職等は、教職員に発熱や風邪症状がないことを確認する。また、感染者発生時に備え、健康状態の記録を学校で保管する。
取組例：毎朝、健康状態について、「健康観察カード」（別紙1）を記入し、出勤時に管理職等へ提出する。

□石けんを使用した手洗いの徹底を図る（出勤後、授業や指導の前後、トイレ後、飲食の前後等）。

□無症状の感染者も他者へ感染させる恐れがあるので、飛沫飛散防止のため、マスク*を着用するとともに、授業や指導等で児童生徒等と接する際は、可能な限り、身体的距離（おおむね1～2m）の確保に努める。

※教職員は児童生徒等に向かって発声する場面が多いことから、マスクに比べ効果が弱いフェイスシールド・マウスシールドではなく、マスクを着用する。教育活動の中で発音の指導等のため、口の動きを見せる必要がある等の場合は、あらかじめ撮影した動画・画像等を活用する等が考えられるが、やむを得ずフェイスシールドやマウスシールドを使用する場合は、身体的距離を十分に確保すること。

□「6 基本的な感染症対策の徹底」を参考に、教職員の執務室（職員室、準備室、事務室等）の換気（特に冬場は留意）、教職員の座席等の距離確保、共用の物や施設等の消毒を徹底する。

□教職員同士で、昼食等、飲食する場面においても、飛沫を飛ばさない座席配置とし、身体的距離がとれない場合は会話を控える。食事後等に歓談する際は必ずマスクを着用する。

□人が集まる会議等については、「密閉」「密集」「密接」及び「大声」をできる限り避け、マスクを着用の上、換気を徹底する。

□感染、濃厚接触者等への特定、体調不良等により急遽出勤できなくなる場合を想定して、日頃から教職員間で業務内容や学級の状況等を情報共有しておく等、休みをとりやすい環境を整える。

□学校現場で感染症対策や心のケア等を最前線で支える教職員の精神的負担にも鑑み、管理職等は、以下のような教職員のメンタルヘルスにも十分配慮する。

- ・必要に応じた校務分掌の見直し
- ・良好な職場環境、雰囲気醸成
- ・相談窓口の周知

※参考：メンタルヘルス啓発資料「こころさわやかに」

令和2年3月 千葉県教育委員会

□校長は、妊娠中の女性教職員に対して、以下を参考にして配慮する。

- ・『「妊娠中及び出産後の女性労働者が保健指導又は健康診査に基づく指導事項を守ることができるようにするために事業主が講ずべき措置に関する指針』の一部改正について(通知)』（令和2年5月18日付け 教職第218号）
- ・厚生労働省「妊婦の方々などに向けた新型コロナウイルス感染症対策」
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_10653.html

<改訂にあたっての参考資料等>

- ・千葉県ホームページ「新型コロナウイルス感染症への対応について」（「新型コロナウイルス感染症について」、「熱があるときは」等）
- ・「新型コロナウイルス感染症に対応した持続的な学校運営のためのガイドラインの改訂について（通知）」（令和3年2月19日 文部科学事務次官）
- ・（新型コロナウイルスに関連した感染症対策に関する対応について）「教育活動の実施等に関するQ&A」（文部科学省）
- ・「海外から帰国・再入国する児童生徒等への対応について」（令和3年1月26日 文部科学省）
- ・「新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく緊急事態宣言を踏まえた小学校、中学校及び高等学校等における新型コロナウイルス感染症への対応に関する留意事項について（通知）」（令和3年1月8日 文部科学省初等中等教育局長、スポーツ庁次長、文化庁次長）
- ・「小学校、中学校及び高等学校等における新型コロナウイルス感染症対策の徹底について（通知）」（令和3年1月5日 文部科学省初等中等教育局長、スポーツ庁次長、文化庁次長）
- ・「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～（2021.4.28 Ver.6）」（令和3年4月28日 文部科学省）
- ・「改訂『生きる力』を育む中学校保健教育の手引（追補版）感染症の予防～新型コロナウイルス感染症～」（令和2年3月 文部科学省）
- ・「新型コロナウイルスに関するQ&A（一般の方向け）令和3年4月23日時点版」（厚生労働省）
- ・「新型コロナウイルス対策 身のまわりを清潔にしましょう。」（厚生労働省、経済産業省、消費者庁）
- ・「新型コロナウイルス対策 ご家庭にある洗剤を使って身近な物の消毒をしましょう」（経済産業省、独立行政法人製品評価技術基盤機構）
- ・「新型コロナウイルス対策 『次亜塩素酸水』を使ってモノのウイルス対策をする場合の注意事項」（厚生労働省、経済産業省、消費者庁）
- ・「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）診療の手引き 第4.1版（令和2年12月25日）」
- ・「新型コロナウイルス感染症に対する感染管理 改訂 2020年10月2日」（国立感染症研究所、国立国際医療研究センター国際感染症センター）
- ・「医療機関における新型コロナウイルス感染症への対応ガイド 第3版」（2020年5月7日 一般社団法人 日本環境感染学会）
- ・厚生労働省・経済産業省・消費者庁特設ページ「新型コロナウイルスの消毒・除菌方法について」
- ・「新型コロナウイルス感染予防のための給食後の歯みがきスタイル指導」（一般社団法人 日本学校歯科医師会）
- ・「小学校、中学校及び高等学校等における新学期に向けた新型コロナウイルス感染症対策の徹底等について（通知）」（令和3年8月20日 文部科学省初等中等教育局健康教育食育課）
- ・「学校で児童生徒等や教職員の新型コロナウイルスの感染が確認された場合の対応ガイドラインの送付について」（令和3年8月27日 文部科学省初等中等教育局健康教育食育課）

等